

病害虫発生予察情報（6月予報）

令和7年5月27日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (6月の県平均平年値)	予報の根拠
稲	葉いもち	発生量：並 (発病株率 0.3%)	前年8月葉いもち発生量：少 (－) 前年9月穂いもち発生量：少(発生なし) (－) 置き苗いもち：発生なし (－) 気象予報：気温：並か高い (+) 降水量：並か多い (+)
	縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)	縞葉枯病発生量：少 ヒメトビウンカ発生量：並 (発病株率 0.01%)	前年8月縞葉枯病発生量：少 (－) 5月の予察灯ヒメトビウンカ誘殺数：並(発生なし) (±) 気象予報：気温：並か高い (±) 降水量：並か多い (±)
	イネミズゾウムシ	発生量：少 (寄生株率 10.8%)	前年7月発生量：少 (－) 5月の予察灯誘殺数：少(誘殺なし) (－) 気象予報：気温：並か高い (±)
	イネドロオイムシ	発生量：少 (東部高冷地：寄生株率 1.5%)	前年7月発生量(東部高冷地)：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：並か高い (±)
	斑点米カメムシ類	発生量：多	5月中旬発生量：多 (+) 5月の予察灯誘殺数：並 (±) 気象予報：気温：並か高い (±) 降水量：並か多い (±)
ばれいしょ	疫病	発生量：やや少	5月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：並か高い (±) 降水量：並か多い (+)
	ジャガイモガ	発生量：並	5月中旬発生量：並(発生なし) (±) 気象予報：気温：並か高い (±) 降水量：並か多い (±)
温州みかん	そうか病	発生量：多 (果実発病度 0.08)	5月上旬新葉発生量：やや多 (+) 気象予報：気温：並か高い (+) 降水量：並か多い (+)
	ミカンハダニ	発生量：やや少 (寄生葉率 5.5%)	5月上旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：並か高い (+) 降水量：並か多い (±)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：並 (発生果率 0.2%)	5月中旬発生量(茶)：並 (±) 気象予報：気温：並か高い (±) 降水量：並か多い (±)
	ヤノネカイガラムシ	発生時期：並 発生量：少 (寄生葉率 0.1%)	5月上旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：並か高い (+) 降水量：並か多い (－)
中晩柑類	かいよう病	発生量：多 (果実発病度 0.05)	5月上旬新葉発生量：並 (±) 気象予報：気温：並か高い (+) 降水量：並か多い (+)

作物名	病害虫名	予報 (6月の県平均平年値)	予報の根拠
なし	黒星病	発生量：やや多 (7月発病果率0.08%)	5月中旬発生量：並(一部多発)(±) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(+)
かき	落葉病	発生量：並	前年9月発生量：少(−) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(+)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：並 (寄生果率0.02%)	5月中旬発生量(茶)：並(±) 気象予報：気温：並か高い(±) 降水量：並か多い(±)
	フジコナ カイガラムシ	発生量：並 (寄生果率0.1%)	5月中旬発生量：並(発生なし)(±) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(−)
キウイ フルーツ	かいよう病	発生量：やや少 (発病葉率8.7%)	5月中旬発生量：少(−) 気象予報：気温：並か高い(±) 降水量：並か多い(+)
果樹全般	果樹カメムシ類	発生量：多	越冬量：多(+) 5月上旬寄生数：多(+) 予察灯誘殺数：多(+) フェロモントラップ誘殺数：多(+) 病害虫防除員報告：多～やや多(+) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(±)
茶	炭疽病	発生量：並 (病葉数4.7葉/1.25m ²)	5月中旬発生量：少(−) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(+)
	もち病	発生量：並 (病葉数8.2葉/1.25m ²)	5月中旬発生量：少(発生なし)(−) 気象予報：気温：並か高い(±) 降水量：並か多い(+)
	輪斑病	発生量：並 (病葉数2.0葉/1.25m ²)	5月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並か高い(±)
	カンザワハダニ	発生量：やや多 (寄生葉率1.0%)	5月中旬発生量：やや多(+) 天敵(カブリダニ類)：多(−) 防除員からの情報：やや多(+) 気象予報：気温：並か高い(±) 降水量：並か多い(−)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：やや多 (叩き落とし虫数 9.5頭/4か所)	5月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(±)
	チャノミドリヒメ ヨコバイ	発生量：やや多 (叩き落とし虫数5.6頭/4か所)	5月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(±)
	チャノホソガ	発生量：少 (巻葉数2.4葉/1.25m ²)	5月中旬発生量：少(−) 気象予報：気温：並か高い(±) 降水量：並か多い(±)

作物名	病害虫名	予報 (6月の県平均平年値)	予報の根拠
きく (施設)	黒斑病・褐斑病	発生量：やや多 (発病株率：0.3%)	5月下旬発生量：並(発生なし) (±) 気象予報：気温：並か高い (＋) 降水量：並か多い (＋)
	えそ病 (トマト黄化えそ ウイルス：TSWV)	発生量：並 (平年発生なし)	5月下旬発生量：並(発生なし) (±) アザミウマ類発生量：少 (－) 気象予報：気温：並か高い (±)
	アザミウマ類	発生量：少 (被害株率：16.9%)	5月下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：並か高い (±)
	ハモグリバエ類	発生量：並 (平年被害なし)	5月下旬発生量：並(発生なし) (±) 気象予報：気温：並か高い (±)
	オオタバコガ	発生量：多	トラップ誘殺量：多 (＋) 気象予報：気温：並か高い (±)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1か月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(＋)、少発要因の場合は(－)を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

静岡県病害虫防除所HPが新しくなりました。



静岡県病害虫防除所 HP

https://www.pref.shizuoka.jp/sangyos_higoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html

2. 予報の根拠と防除対策

【稲】

<生育の概況等>

生育は平年並～やや遅い。

●いもち病(葉いもち)

予報の根拠

- ・前年8月の巡回調査では、平均発病株率は0.5%（平年2.3%）と平年より少なかった。また前年9月の巡回調査では、穂いもちの発生は認められなかった（平年発病株率0.1%）。
- ・5月中旬の巡回調査では置き苗の葉いもちの発生は認められなかった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高く、曇りや雨の日が多い予報が出ているので、発生をやや助長する（いもち病の発病好適条件は気温15～25℃、葉面の10時間以上の湿潤状態）。

防除対策

- ・置き苗は本田に植え付けた株よりも早期に葉いもちが発生し伝染源になりやすいため、田植え後できるだけ早く補植をすませ、不要な苗は速やかに処分する。
- ・常発ほ場では薬剤の予防散布を行う。
- ・急性型病斑（病斑周辺部に褐色部分がなく、暗緑色あるいはねずみ色の病斑）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。
- ・他県ではQoI剤耐性いもち病菌の発生が問題となっており、本県でも発生が懸念されるため、耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する（詳細は「[農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準](#)」の「殺菌剤耐性菌に関する各種資料について」の項を参照）。

●縞葉枯病(ヒメトビウンカ)

予報の根拠

- ・前年8月の巡回調査では、縞葉枯病の発生は認められなかった（平年0.5%）。
- ・5月第3半旬時点の県内3か所の予察灯におけるヒメトビウンカの誘殺は認められなかった（平年誘殺なし）。なお、成虫の誘殺データについては静岡県病害虫防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」で情報提供している。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いため、本病を媒介するヒメトビウンカの増殖を特には助長しない。このため、本病の発生も特には助長されない。

防除対策

- ・本病の常発ほ場では、ヒメトビウンカの発生に注意する。発病時期が早いほど被害が大きくなるため、幼穂形成期頃までを中心に防除を徹底する。
- ・ヒメトビウンカはコムギ収穫後に水田に侵入するため、コムギ栽培ほ場の近隣の水田では6月上中旬に本田防除を実施する。

●イネミズゾウムシ

予報の根拠

- ・前年7月の巡回調査では、イネミズゾウムシの平均被害株率は1.4%（平成2.8%）と平成より少なかった。
- ・5月第3半旬時点の県内3か所の予察灯における成虫の誘殺は確認されていない（平成0～1.0頭/半旬）。
- ・1か月予報では、気温は平成並か高いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・常発地域で箱処理剤を使用していない場合や食害が顕著な場合は、薬剤を散布する。

●イネドロオウムシ(イネクビホソハムシ)

予報の根拠

- ・本虫の発生地域である東部高冷地における前年7月の巡回調査では、イネドロオウムシの被害は認められなかった（平成4.8%）。
- ・1か月予報では、気温は平成並か高いため、発生を特には助長しない。
- ・例年、6月以降は幼虫による食害が増加する。

防除対策

- ・常発地域で箱処理剤を使用していない場合や食害が顕著な場合は、幼虫が発生する6月中下旬に薬剤防除を行う。

●斑点米カメムシ類

予報の根拠

- ・5月中旬の畦畔等の雑草におけるカメムシ類の発生は平成より多かった（30回すくい取り平均捕獲数：7.6頭、平成3.6頭）。地域別では、中遠（早期作型）地域で、平均捕獲数が22.3頭と平成より多く（平成5.7頭）、他4地域（田方平坦地・東部高冷地・志太榛原・中遠西部）については平成並～少なかった。
- ・5月第3半旬時点の県内3か所の予察灯における誘殺数は、平成並に推移している。なお、成虫の誘殺データについては静岡県病害虫防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」で情報提供している。
- ・1か月予報では、気温は平成並か高く、降水量は平成並か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・畦畔及び水田周辺の除草は、斑点米カメムシ類の密度低下に有効である。ただし、斑点米カメムシ類を雑草から水田内に移動させないように、出穂10日前には除草を終了する。

<その他の病害虫>

●ニカメイガ

- ・前年9月の被害は平成並であった（平均被害株率0.2%、平成0.5%）。
- ・5月第3半旬時点の予察灯およびフェロモントラップにおける誘殺数は、浜松市中央区雄踏町で平成より多く推移しており、他地点では平成並～少なく推移している。なお、成虫の誘殺データについては静岡県病害虫防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」で情報提供している。

●トビイロウンカ

- ・ 5月第3半旬時点で予察灯での誘殺は確認されていない。
- ・ 本種は梅雨の下層ジェット気流に乗り飛来する。日本における発生量は年によって大きく異なり、飛来源における発生状況や飛来時期、量、回数に影響される。また、世代交代を繰り返すことで急激に増殖し、数が増えてからでは効果が高い薬剤を使用しても十分な殺虫効果が得られない場合がある。このため、予防に重点を置いた防除を実施する。

●スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)

- ・ 前年6月の巡回調査では、スクミリンゴガイの平均発生面積率は34%（平年39%）と平年並だった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並か高いため本貝の発生をやや助長する。
- ・ 移植後2～3週間は、食害を抑制するために浅水管理（4cm以下（理想は1cm以下））に努める。
- ・ 発生地域の普通期水田では移植後の薬剤処理を実施する。
- ・ 6月中旬～7月、水路壁面や畦波に赤橙色の卵が多数産卵されるため、見つけ次第卵をつぶす。なお、既に産卵や被害が確認されている地域では、確認次第、防除を行う。
- ・ スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が存在する可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめること。

【ばれいしょ】

<生育の概況等>

平年並に推移している。

●疫病

予報の根拠

- ・ 5月中旬の巡回調査では、疫病は認められなかった（平年発病株率6.6%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並か高いが、降水量は平年並か多いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 本病は10℃を超えると活動が始まり、18～20℃が最適温度となる。開花期以降、気温が15℃以上かつ降雨により湿度が高い状態が継続すると発病しやすくなる。
- ・ 発病に好適な気温下で降雨が続くと本病は急速にまん延する。発病してからの防除は難しいため、継続した予防散布を行う。
- ・ 発病株や罹病残さは伝染源となるので、ほ場外へ持ち出し処分する。

●ジャガイモガ

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、被害は確認されなかった（平年被害株率0.3%）。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年並か高いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・例年発生するほ場では特に注意する。
- ・掘り取ったイモは、速やかに屋内に搬入し、産卵を防ぐ。
- ・イモ残さは発生源となるのでほ場に残さない。

【温州みかん】

<生育の概況等>

県伊豆農業研究センター（東伊豆町）における青島温州の開花期は、平年より3日程度遅かった。病害虫防除員からの報告によると、生育は地域や品種によりばらついているが、開花期は平年よりやや遅い地域が多かった。着花量は平年並～やや少ない。

●そうか病

予報の根拠

- ・5月上旬の巡回調査では、新葉の平均発病度は0.07（平年0.04）と平年よりやや多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・感染適温は20～26℃で、5～6月に雨が多いと果実で多発する。
- ・発芽期以降、越冬病斑から新葉へ降雨のたびに伝染する。新葉の病斑から幼果に二次伝染するため、5月下旬（落弁直後）、6月下旬（幼果期）に薬剤防除を行う。
- ・苗、若木での発生が多い病害であるため、新植や改植をしたほ場では発生に注意する。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・5月上旬の巡回調査では、平均寄生葉率は0.3%（平年3.0%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年並か高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・これまでに、土着天敵に影響の小さい殺虫剤により、天敵を保護した園地では、6月の防除を省くことができる。ただし、寄生葉率が30%を超える場合は、薬剤防除を実施する。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査（茶）における発生量は、平年並であった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高いが、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・アメダス気象データを用いた予測によると、第2世代成虫の発生時期は産地により時期が異なり、6月5～19日（昨年より5日程度遅い）と予想される。
- ・産地ごとの詳細な防除時期は、病害虫防除所ホームページ「[防除時期等予測](#)」を参照する。
- ・本種各世代において、飛来最盛日の1週間前～飛来最盛日までが薬剤防除適期である。
- ・光反射シートマルチを利用する場合には、樹冠占有面積率60%以下の園地で、反射率90%以上のシートを全面被覆すれば、薬剤防除と同等の効果がある。
- ・炭酸カルシウム微粉末剤25～50倍を6月上旬と7月中旬に計2回散布することにより、6～8月にかけて化学殺虫剤を散布した場合とほぼ同等の防除効果が得られる。

●ヤノネカイガラムシ

予報の根拠

- ・5月上旬の巡回調査では、寄生は認められなかった（平年の平均寄生葉率0.1%）。
- ・県予察ほ場（静岡市清水区茂畑：標高約200m）における1齢幼虫の初発日は5月12日（昨年：5月8日）であった。防除適期となる2齢幼虫発生ピークは6月中下旬と予想されるが、標高約100mより低い産地ではこれより1週間程度早くなる。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高いが、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・本種の発生が少ない園では防除を省けるが、発生が見られる場合は2齢幼虫の発生ピークに薬剤散布する。

<その他の病害虫>

●黒点病

防除対策

- ・前年は黒点病が過去10年で最も多発したため、ほ場内の菌密度は高いと考えられる。病原菌は樹上やほ場内の枯枝で越冬し伝染源となるため、ほ場からの枯枝の除去を徹底する。
- ・1回目の防除は6月上旬に実施し、2回目の防除は散布間隔25～30日又は累積降水量250～300mmを目安に行う。

●ゴマダラカミキリ

防除対策

- ・成虫は6月上旬から羽化を開始し、葉等を後食して約一週間で卵巣を発達させる。産卵は6月中旬以降に主幹地際部に行くことから、6月上旬までにシュロの繊維や金網などの産卵防止用資材を地際部に巻き付け、地際部を露出させない。

【中晩柑類】

＜生育の概況等＞

県伊豆農業研究センター（東伊豆町）における開花期は品種により異なるが、平年より3～5日程度遅かった。

●かいよう病

予報の根拠

- ・5月上旬の巡回調査では、新葉の平均発病度は0.04（平年0.04）と平年並だった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・病原菌の生育適温は20～30℃であり、風雨により伝染する。5～6月に雨が多いと多発する。
- ・新葉の病斑から幼果に二次伝染するため、5月下旬及び6月中下旬（梅雨期）に薬剤防除を行う。
- ・新梢に発病が見られるほ場では、降雨前に銅水和剤または抗生物質の散布を行う。なお、銅水和剤の散布では薬害軽減のため炭酸カルシウム剤（200倍）を加用する。
- ・風ずれなどの傷口から病原菌が容易に侵入するため、防風垣、防風網の整備を行い防風対策に努める。

【ハウスみかん】

＜その他の病害虫＞

●ミカンキイロアザミウマ・ネギアザミウマ

防除対策

- ・着色期での発生に注意し、初期防除に努めるとともにハウス内外の除草を徹底する。また施設開口部に防虫網や光反射ネットを張り、施設内への侵入を防ぐ。

【なし】

＜生育の概況等＞

病害虫防除員からの報告によると、生育は平年並であり、着花量は平年並～多い。

●黒星病

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、発病果率は0.7%（平年0.2%）と平年より多かったが、一部の多発ほ場を除くと平年並だった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・病原菌の発育適温は20～22℃であり、4～5月の降雨が多かった地域では発生が多くなる。
- ・果実への感染は主に幼果期におこり、6月まで続く。病斑から二次伝染するため、罹病部は除去する。
- ・耐性菌の発生を抑えるため保護殺菌剤による予防散布に重点を置き、同一系統の薬剤は連用を避ける。

<その他の病害虫>

●黒斑病

防除対策

- ・幸水、豊水、静喜水は抵抗性品種で防除の必要はない。新水、喜水は罹病性品種で発病しやすいため、防除を行う。
- ・梅雨期が発病まん延期であり、降雨状況に合わせて防除を行う。

【かき】

<生育の概況等>

病害虫防除員からの報告によると、生育や着花量は地域によりばらついているが、いずれも平年並の産地が多い。

●落葉病

予報の根拠

- ・前年9月の巡回調査では、発病葉率は0.2%(平年9.9%)と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いため、本病の感染を助長する。

防除対策

- ・本病は罹病した落葉が主要伝染源であり、降雨時に雨滴で飛散し感染を拡大させる。
- ・5～7月が主な感染時期であり、60～120日の潜伏期間後に発病する。8月以降の散布では防除効果が得られないため、5～7月の降雨前に予防散布により防除を行う。
- ・本病は肥料不足、長雨などにより樹勢の弱った木に発生しやすいため、栽培管理に注意する。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査(茶)における発生量は、平年並であった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高いが、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・アメダス気象データを用いた予測によると、第2世代成虫の発生時期は産地により時期が異なり、6月5～19日(昨年より5日程度遅い)と予想される。
- ・産地ごとの詳細な防除時期は、病害虫防除所ホームページ[「防除時期等予測」](#)を参照する。
- ・本種各世代において、飛来最盛日の1週間前～飛来最盛日までが薬剤防除適期である。
- ・花卉落下期までの初期防除を徹底する。

●フジヨナカイガラムシ

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、果実への寄生は認められなかった(平年寄生なし)。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高いが、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・アメダス気象データ（浜松）を用いた予測によると、5月27日以降の気温が平年並で推移した場合、防除適期となる1～2齢幼虫発生時期は6月5～25日頃と予想される。
- ・前年発生が見られた園地では発生に注意し、第1世代1～2齢幼虫期に防除を行う。第2～3世代の場合、各齢期の個体が混在するとともに、生息場所となる果実とへたの隙間が果実の肥大によって狭くなり薬剤の散布ムラが生じやすくなることから、丁寧な散布を心がける。

<その他の病害虫>

●ハダニ類

防除対策

- ・多発すると落葉することもあるが、多くの場合、経済的被害は少ない。多発園地では殺ダニ剤を散布する。

【キウイフルーツ】

<生育の概況等>

病害虫防除員からの報告によると、生育は平年並～やや遅く、着花量は平年並である。

●かいよう病

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、発病葉率は5.1%（過去9年間の平均11.0%）と例年より少なかった。ただし、一部園地では多発していた。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高いが、降水量は平年並か多いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・感染適温は10～20℃であり、風雨により伝染する。
- ・細菌病であり、樹体内に病原菌が侵入すると根本的な治癒は困難であるため、防除は予防が中心となる。
- ・受粉結実後～果実肥大期までに予防的に防除を実施する。ただし、花芽伸長開始後は使用する薬剤によっては薬害が出るため、薬害が出にくいコサイド3000を使用し、薬害軽減のため炭酸カルシウム剤を加用する。
- ・風ずれなどの傷口から感染するため、防風垣、防風網の整備を行い防風対策に努める。
- ・管理作業時に付着した罹病樹の樹液により感染が拡大するため、せん定器具はこまめに消毒する。

【果樹全般】

●果樹カメムシ類(チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ)

予報の根拠

- ・2～3月の越冬量調査(県内20地点)において、チャバネアオカメムシ越冬量/落葉1㎡は、県平均2.9頭(平年1.0頭)と平年より多かった。
- ・5月上旬の巡回調査(県内30地点)では、かんきつの花における本虫の寄生数は0.5頭/10か所(平年1.5頭)と平年より少なかったが、病害虫防除員による同様の調査(県内72地点)では、本虫の寄生数は1.6頭/10か所(平年(8か年平均)1.1頭)と平年より多かった。
- ・県内4か所の予察灯における5月1～20日の本虫の合計誘殺数の平均は、949頭(平年219頭、平年比4.3倍)と平年より多かった。なお、本虫の内訳は、チャバネアオカメムシが514頭(平年92.1頭)、ツヤアオカメムシが411頭(平年126頭)、クサギカメムシが23.5頭(平年1.0頭)であった。
- ・県内6か所のフェロモントラップにおける5月1～20日の本虫の合計誘殺数の平均は、236頭(平年75.8頭、平年比3.1倍)と平年より多かった。なお、本虫の内訳は、チャバネアオカメムシが157頭(平年35.8頭)、ツヤアオカメムシが77.2頭(平年35.5頭)、クサギカメムシが2.3頭(平年4.5頭)であった。
- ・果樹関係の病害虫防除員19名からの報告によると、本虫の発生について2名が「多い」、12名が「やや多い」と回答した。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年並か高いため、発生をやや助長する。
- ・以上から、今後の果樹カメムシ類の発生量は多いと予想される。

防除対策

- ・昨年、西日本等の果樹産地では、カメムシ類の越冬成虫が4～8月にかけて果樹園に大量飛来し、本虫の加害による落花・落果・新梢枯死等の被害が生じた。本県においても越冬成虫の飛来に細心の注意を払う。なお、静岡県病害虫防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」では、本虫に関する各種情報(予察灯及びフェロモントラップにおける発生状況、ヒノキ球果の着果量や球果における寄生数、球果での吸汁痕数、果樹園への秋季以降の飛来予測日等)を随時提供しているので参照する。
- ・静岡県病害虫防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」から発生状況等の最新情報を確認するとともに、地域の予察灯やフェロモントラップにおけるカメムシ類の発生状況を参考にし、ほ場の見回りをこまめに行う。ほ場で少数でも本虫の発生を確認したら、本虫が集合フェロモンを放出し大量飛来を招く前に、直ちに薬剤防除を行う。また、周辺ほ場への大量飛来がみられた場合、飛来前の予防的な薬剤散布を心掛ける。なお、本虫の移動範囲は広いため、地域での一斉防除が効果的である。また、ヒノキ・スギ林の隣接地域(特に中山間地)や台風・暴風雨後の園地では、急激に発生が増加する場合がありますので注意する。
- ・薬剤防除については、静岡県病害虫防除所による「[静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準](#)」を参照する。なお、薬剤の選択に際しては収穫前日数に注意する。
- ・発生状況及び防除対策については、「[令和6年度注意報第6号\(かんきつ、びわ、落葉果樹 果樹カメムシ類\)](#)」も参照する。

【茶】

＜生育の概況等＞

5月中旬の巡回調査時では、一番茶の摘採はほぼ終了していた。

●炭疽病

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、平均発病葉数は0.2葉/1.25㎡(平年3.4葉/1.25㎡)と平年よりも少なかった。
- ・感染には新芽生育時に10時間以上の濡れが必要である。1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いため、発生を助長する。

防除対策

- ・降雨により胞子が飛散して感染するため、梅雨期となる6月は感染機会が多くなる。例年、発生が見られる茶園やすでに発病している茶園では、二番茶萌芽期から開葉期にかけて防除を行う。なお、薬剤防除を2回実施する場合には、1回目に予防剤を使用し、2回目に治療剤を使用する。

●もち病

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、発生は見られなかった(平年発病葉数4.1葉/1.25㎡)。
- ・本病は新芽生育時に降雨が多く、湿潤な日が続くと多発する。1か月予報では、気温は平年並か高いが、降水量は平年並か多いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・高湿度条件下で胞子が飛散して感染するので、風通しの悪い山間地域茶園等では発生しやすい。潜伏期間が10日程度と短いため、二番茶摘採期の頃に発生する。なお、薬剤防除を2回実施する場合には、1回目に予防剤を使用し、2回目に治療剤を使用する。

●輪斑病

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、平均発病葉数は0.02葉/1.25㎡(平年0.03葉/1.25㎡)と平年並だった。
- ・発病は25℃以上の高い気温が好適である。1か月予報では、気温は平年並か高いため、本病の発生をやや助長する。なお、降雨の多少は本病の発生程度に関係しない。

防除対策

- ・摘採や整枝によってできた傷口から発病が始まるため、常発茶園では二番茶摘採後に速やかに防除を行う。なお、摘採直後に防除ができない場合は、整枝時に摘採面より2cm程度深く刈り、その直後に薬剤散布を行う。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、摘採面での平均寄生葉率は3.7%（平年2.6%）と平年よりやや多かった。また、天敵のカブリダニ類の叩き落とし虫数は3.7頭/4か所（平年0.9頭/4か所）と平年より多かった。
- ・病害虫防除員からは、11名中6名が平年よりやや多い報告だった。
- ・例年、6月の発生は天敵のカブリダニ類により抑制される。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高いものの、降水量は平年並か多いため、発生は特にはあまり助長されない。

防除対策

- ・6月は、天敵の活動等により発生は少なくなるが、既に発生が多い茶園では早めに防除を行う。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は3.3頭/4か所（平年3.7頭/4か所）と平年並だった。
- ・例年、二番茶生育期から発生が増加する。1か月予報では、降水量は平年並か多いものの、気温は平年並か高いため、発生はやや助長される。

防除対策

- ・二番茶以降の萌芽から開葉期にかけて防除を実施する。
- ・一番茶摘採後の更新園では、6月から7月にかけて再生芽への寄生が増加する場合があるので、発生状況に注意し、再生芽の生育期に防除を実施する。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は1.7頭/4か所（平年1.9頭/4か所）と平年並だった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か多いものの、気温は平年並か高いため、発生はやや助長される。

防除対策

- ・例年、二番茶生育期から発生が増加するので、新芽の開葉期に防除を実施する。
- ・一番茶摘採後の更新園では、6月から7月にかけて再生芽への寄生が増加すると被害が大きくなるので発生状況に注意し、再生芽の生育期に防除を実施する。

●チャノホソガ

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、平均巻葉数は0.2葉/1.25㎡（平年0.5葉/1.25㎡）と平年より少なかった。
- ・県内各地のフェロモントラップへの誘殺時期は、ほぼ平年並である。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並か高いものの、降水量は平年並か多いため、発生はあまり助長されない。

防除対策

- ・幼虫の発生が新芽生育期に合致すると被害が大きくなるので、地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移や新芽への産卵状況に注意し、適期防除に努める。なお、成虫の誘殺データについては静岡県病害虫防除所ホームページ [「害虫誘殺グラフ」](#) で情報提供している。

<その他の病害虫>

●チャハマキ・チャノコカクモンハマキ

防除対策

- ・5月中旬の巡回調査では、チャハマキの平均寄生虫数は0.78頭/1.25m²（平年0.55頭/1.25m²）と平年よりやや多く、コカクモンハマキの平均寄生虫数は0.02頭/1.25m²（平年0.15頭/1.25m²）と平年より少なかった。
- ・4月第1～5月第4半旬の各地域の予察灯及びフェロモントラップへの越冬成虫の誘殺数は、チャハマキ、チャノコカクモンハマキともに平年よりも多かった。
- ・成虫に活性のある殺虫剤で防除する場合は、発生に注意し、各地域の発蛾最盛期頃を目安に散布する。

●ナガチャコガネ

防除対策

- ・成虫は年1回6月頃に発生するので、成虫発生初期（6月上中旬）に被害が出た場所とその周辺部を対象として薬剤を処理する。
- ・成虫の誘殺データについては病害虫防除所ホームページ [「害虫誘殺グラフ」](#) で情報提供している。

【きく(施設)】

<生育の概況等>

生育は平年並。

●黒斑病・褐斑病

予報の根拠

- ・5月下旬の巡回調査では、発病は認められなかった（平年発生なし）。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高く、曇りや雨の日が多い予報が出ているので、発生をやや助長する（本病は特に降雨が続くと発生が多くなる。病原菌の生育適温は黒斑病24～28℃、褐斑病20～28℃）。

防除対策

- ・本病は潜伏期間が長く発病後の防除では手遅れとなるので、薬剤の予防散布を行う。
- ・多湿で発生が助長されるため、梅雨期には特に多発に注意する。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して適切に処分する。
- ・土の上に落ちた被害葉が伝染源となるため、被害葉をほ場に放置しない。
- ・親株が罹病しているとそこから新芽に伝染し、定植してから発病することが多いため、発病が見られる株を親株として用いない。

●えそ病(トマト黄化えそウイルス:TSWV)

予報の根拠

- ・ 5月下旬の巡回調査では、発病は認められなかった（平年発病なし）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並か高いため、媒介虫であるアザミウマ類（特にミカンキイロアザミウマ）の増殖を特には助長しない。このため、本病の発生も特には助長しない。

防除対策

- ・ 発病株は伝染源となるため速やかに抜き取り、土中に埋める等して適切に処分する。
- ・ ミカンキイロアザミウマはトマト黄化えそウイルスを媒介するため、食害が認められる場合には速やかに薬剤散布を実施する。
- ・ 施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、アザミウマ類の侵入を抑制する。

●アザミウマ類(クロゲハナアザミウマ、ネギアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ)

予報の根拠

- ・ 5月下旬の巡回調査では、平均被害株率は1.2%（平年11.2%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並か高いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 定植後の初期防除に努める。
- ・ 親株は発生源となる可能性があるため、採穂後は親株をほ場に放置せず、速やかに処分する。
- ・ 施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。
- ・ ほ場周辺の雑草はアザミウマ類の発生源となるため、ほ場周辺の除草を行う。

●ハモグリバエ類(マメハモグリバエ)

予報の根拠

- ・ 5月下旬の巡回調査では、被害は認められなかった（平年被害なし）。
- ・ 夏期はハモグリバエ類の天敵（寄生蜂）の活動により密度が抑制されやすい。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並か高いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 葉に1mm程度の白い斑点（産卵痕及び摂食痕）が多数見られる場合は、薬剤散布を実施する。

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・ 浜松市のきく産地及び磐田市に設置しているフェロモントラップにおける誘殺数は、平年より多く推移している。なお、成虫の誘殺データについては静岡県病害虫防除所ホームページ [「害虫誘殺グラフ」](#)で情報提供している。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並か高いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 例年7月以降に幼虫の発生が増加するが、6月から芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。

3. 季節予報

● 1か月予報（東海地方 令和7年5月22日 名古屋地方気象台発表）

【予報期間】 5月24日から6月23日

【予想される向こう1か月の天候】

特に注意を要する事項	期間の前半は気温の変動が大きいです。	
向こう1か月	天候	期間の前半は、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。
	降水量	降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。
	日照時間	日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。
1週目	気温	1週目は、低い確率50%です。
2週目	気温	2週目は、高い確率50%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、高い確率50%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	20	40	40
1か月	降水量	20	40	40
1か月	日照時間	40	40	20
1週目	気温	50	40	10
2週目	気温	20	30	50
3～4週目	気温	20	30	50

【予報の対象期間】

1か月	:	5月24日（土）～	6月23日（月）
1週目	:	5月24日（土）～	5月30日（金）
2週目	:	5月31日（土）～	6月6日（金）
3～4週目	:	6月7日（土）～	6月20日（金）

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分（それぞれ33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の2分の1より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1

TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780

URL

<https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>